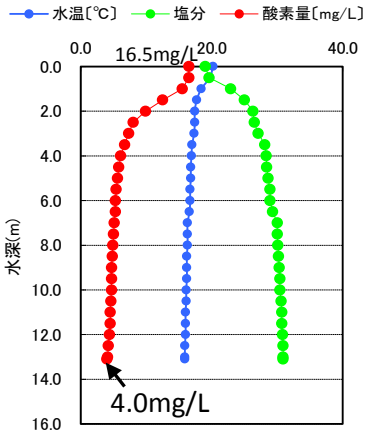
平成26年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.5	調査年月日	平成26年5月2日　11:20　～　12:00

＜調査地点＞



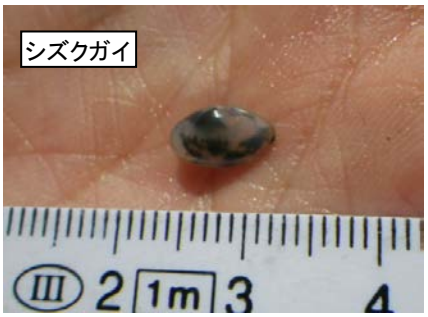
＜底質状況、底生生物出現状況＞

船の科学館の正面で採泥。
航路であるため、水深は14mである。
海底の酸素量は、4.0mg/L（49.5%）であり、無酸素状態ではなかった。
海面の酸素量は16.5mg/L（206.1%）で赤潮状態であった。

底質性状は軟らかい泥であった。
海底面は酸素があるため、泥の色は灰色であったが、泥の中は、酸素がないため、真っ黒であった。

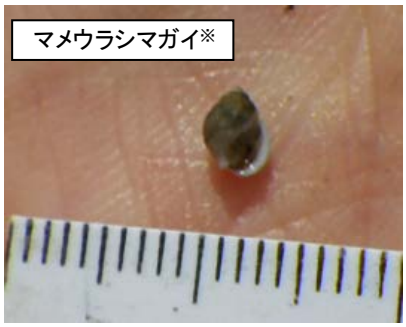
フルイに残った試料。貝殻などは少なくシズクガイの貝殻がほとんどである
（生息する生物が限られている）。

臭気は、硫化物臭（卵の腐った臭い）が強烈で、調査員もビックリ！



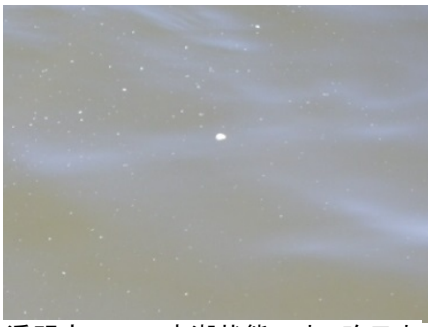
酸素が少ない環境でも生息できる。
東京湾では代表的な汚濁指標種。

こちらも、東京湾を代表する生物。
まわりに写っているのは、シズクガイの貝殻片。



浅海の泥底に生息する小型の巻貝。
※詳細な査定後、種名を確定。

調査地点では、多毛類や巻貝が数種類確認された。このように、東京湾の湾奥部でも、貧酸素状態でなければ、様々な生き物が生息している。



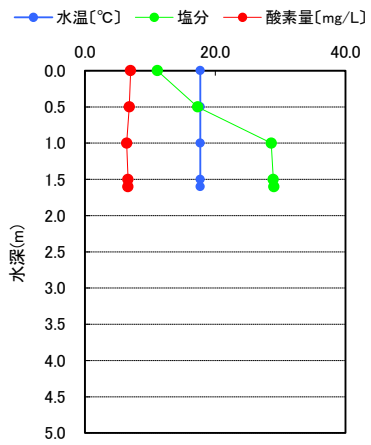
透明度0.6mの赤潮状態の中、昨日までの降雨もあって、海面には直径1cm程度のホワイトボール（油脂の塊）がみられた。

平成26年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	三枚洲（荒川河口）	調査年月日	平成26年5月2日　10:03　～　10:45

＜調査地点＞



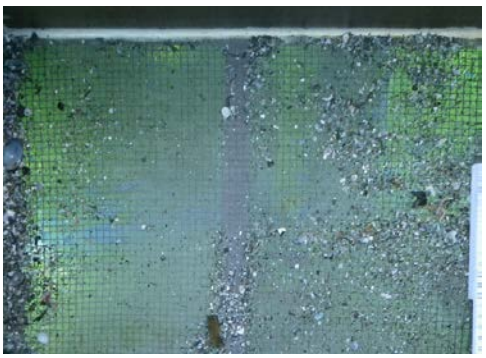
＜底質状況、底生生物出現状況＞

荒川と旧江戸川の河口に残された天然の浅場。調査時の水深は2.6mあり、大潮の干潮時でも干出しない。

底質は細砂であり、柔らかい泥は全く無い。

底土中の生物を見つけるために採泥器で採取した底土をフルイにかける。

結構力のいる作業である。



フルイに残った試料。小石や貝殻などは少なく、砂のほとんどはフルイの目合を抜けてしまう。

目につく大型の底生生物として、多毛類などが確認された（大型の二枚貝などは確認されなかった）。

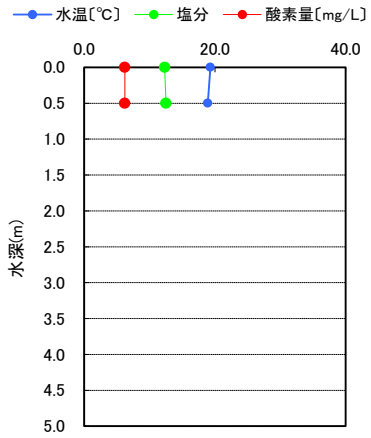
三枚洲においては、フルイに残った生物では多毛類が目立ったが、クーマ類などの小型甲殻類（体長数mm）も確認された。底質は、泥分がほとんど無い細砂であるため、汚濁指標種はほとんどみられない。

平成26年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.31(多摩川河口)	調査年月日	平成26年5月1日　11:30　～　12:05

＜調査地点＞



＜底質状況、底生生物出現状況＞

多摩川河口から1.5km付近の浅場であり、干潮時には川の中に立ち込むことが可能（調査時の水深は1m程度）。

陸側は工場群であるため、歩いて水辺に近寄ることはできない。

底質は細砂の混じった泥で、臭いはない。

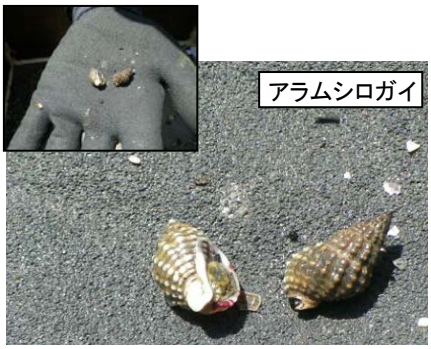
フルイに残った試料。
アサリや多毛類が確認された。

様々な大きさの個体が確認された。
大型の個体も確認された。

アサリの天敵であるツメタガイという巻き貝が襲って食べた痕。殻に穴を開けて、中の肉を食べる。

内湾奥の干潟から水深20mまでの砂泥底に生息する。
血液中にヘモグロビンを持つため、他の貝と違い、軟体部は赤みが強い。

酸素が少ない環境でも生息できるため、夏場の東京湾でも生き残っていることが多い。



殻高1.5cmほどの巻貝である。
殻の表面には粗い粒状突起が並ぶ。
魚や貝の死骸に集まり、『海の掃除屋』といわれる。

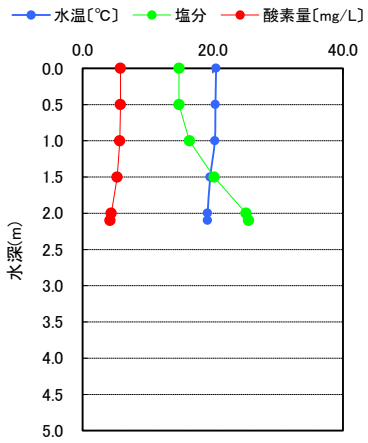
時折飛び出す口の先端にある黒い4本の鈎状の歯が特徴である。

平成26年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	平成26年5月1日　12:37　～　13:37

＜調査地点＞



＜底質状況、底生生物出現状況＞

羽田空港の北側に残された天然の干潟。森ケ崎水再生センターが隣接する。歩いて入ることはできない。

調査状況。
春の大潮の干潮時には広大な干潟が出現する。

採取地点の底質は細砂であり、柔らかい泥は含まれていない。

フルイに残った試料。
貝殻片が多く混じっていた。

殻長10cm程度の大型の個体が採取された。北米原産の外来種で、東京湾の湾奥の泥底やカキ礁周辺では多く見られる。食用にされている。

アサリの稚貝が採取されたが、大型の個体は確認できなかった。

干潟上ではたくさんの貝が自分で糸を出して絡まり合いマット状になる。当地ではまだマット状の状態は確認されていない

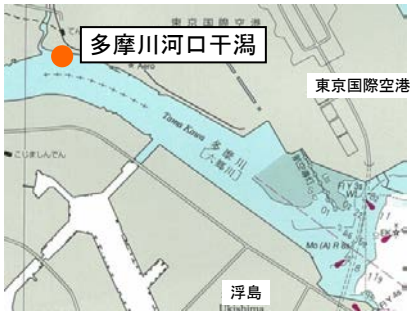
調査点の周辺の干潟上では、ソトオリガイ、ヤマトシジミなどの二枚貝、マメコブシガニのほか、ミズヒキゴカイなどの多毛類が多数確認された。
ヤマトシジミは大型の個体が目立った。

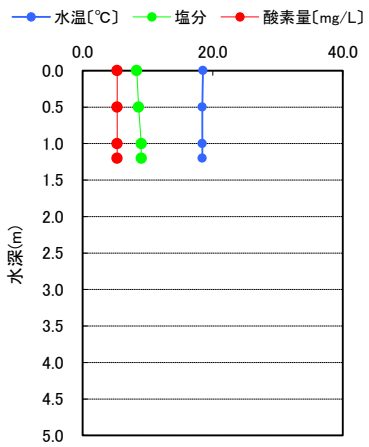
平成26年度　東京都内湾水生生物調査　5月底生生物調査　速報

東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	平成26年5月1日　10:06　～　11:00

＜調査地点＞

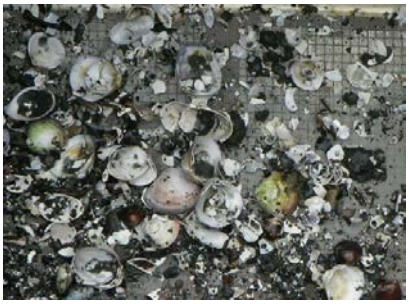




＜底質状況、底生生物出現状況＞

多摩川左岸側（北側）の海老取川河口付近の干潟を調査した。

底質はシルト（やわらかい泥）が混じった細砂であった。
臭いはなかった。



フルイに残った試料。
貝殻片が多く混じっていた。

様々な大きさのヤマトシジミが採取された。

＜調査地点周辺の底生生物生息状況＞

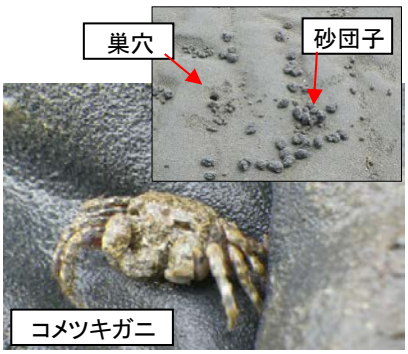
潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝。
東京湾のものは形が細くて、模様のコントラストが強いものが多い。

淡水の影響の強い内湾奥の干潟の泥底に深く潜って生活する。
長い水管を持つ。

交尾をしている最中。
干潟上では、水たまりや浅い水の流れの中にいることが多い。

横長のカニで、紫色かかったハサミには、たくさんの顆粒がある。ヤマトオサガニよりも、砂が多い場所に住んでいる。

柔らかい水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。



岸寄りの砂地に巣穴を掘って生活している。餌をとった残りの砂を小さな砂団子に丸めて巣穴の周りに並べる。